⑶　「ＵＤの視点による手立て」について効果的な話し合いを進めるためのワークショップ型の事前・事後研究会

山形県教育センターでは、平成２１年度「授業研究ハンドブック」において、ＰＤＣＡサイクルによる授業づくりの中で、事前・事後研究会の重要性について紹介している。特に、ワークショップ型の事前・事後研究会は、参観者一人一人がテーマや目的に沿った意見を出しやすく、同時に互いの発想の異質さを感じやすいことから、今後に向けた様々なアイデアを生み出すことに期待ができる手法といえ、これまでも、すでに県内の多くの学校において実施されている。

そこで、本研究では、事前・事後研究会の中で、ＫＪ法による付箋紙などを活用したワークショップでの話し合いを進めることによって、教員同士の同僚性を十分に発揮し、ＵＤの視点を取り入れた授業づくりについて忌憚のない意見を出し合い、具体的な授業改善の方向性を探っていきたいと考える。

＜ＫＪ法による付箋紙などを活用したワークショップの進め方（例）＞

① まず少人数のグループ（４～６名程度）を作り、進行係１名と報告係１名を決める。
② 各自の感想や意見を付箋紙に記入する。成果は赤色、課題は青色、今後のアイデアは黄色などと、内容によって使う付箋紙の色を決めておく。授業参観時に記入してもよい。
③ 模造紙には、指導案の「本時の指導」や授業公開シートを拡大したコピーを貼りつけておくなどして、「ＵＤの視点による手立て」がわかるようにしておく。
④ 各自が発表しながら付箋紙を模造紙に貼り出していく。まず最初の一人が出した意見に対して、類似した意見を出し合う形にすると、内容を類型化しやすい。できれば、見出しをつけ、グループ内の意見を見てわかりやすく整理する。（授業の流れにそって付箋紙を貼るのか、「ＵＤの視点による手立て」にそって貼るのか、事前に決めておく。）
⑤ ④を見ながら、グループ内の感想や意見を振り返り、話し合う。
⑥ ④を見せながら、報告係が、グループで話し合われたことを、全体に報告する。
⑦ 最後に、授業者が感想を述べる。

なお、ＫＪ法以外にも、学校の実態に合わせて、進めやすい話し合いの持ち方を工夫して実施するようにしたい。

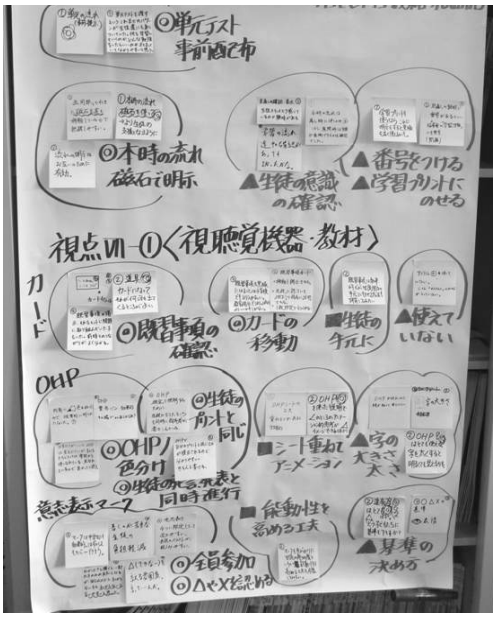


図４－１－４　　ワークショップ型事後研究会の成果物

２　ＵＤの視点を取り入れた実践協力校における授業実践

⑴　全校で学級づくりを大切にしたＵＤの授業づくり　～寒河江市立西根小学校～

①　授業づくりの特色

西根小では、心の通い合いのある温かな人間関係をつくり、互いに認め合いながら学びを深めていくことで、児童一人一人に学ぶ力をつけさせたいと考え、研究主題を「共に学び、伸びていく子どもの育成」として、今年度で６年目の学校研究に取り組んでいる。これまで生徒指導の三機能である「自己決定」、「自己存在感」、「共感的人間関係」を、授業の中でも意識し、「安心感のある温かな人間関係（仲間）づくりの工夫」と「学び合う関わり合いを大切にした授業づくりの工夫」を両輪とした授業実践を積み重ねている。学級では、子どもの実態、担任の願い、子どもたちの願いから、１年間を通した授業づくりのテーマ（自分たちが目指す授業像）を設定して、子どもとともに授業を創るという意識で取り組んでいる。

今年度は、副主題を「ＵＤの視点を取り入れた指導の工夫を通して」とし、授業改善の柱の中に位置づけた。授業の「焦点化」、「視覚化」、「共有化」を図るために、「ＵＤの７つの視点」を取り入れて具体的な指導の手立てを工夫し、より一層の学級集団づくりの充実とともに、確かな学びの育成を目指して校内研究に取り組んだ。

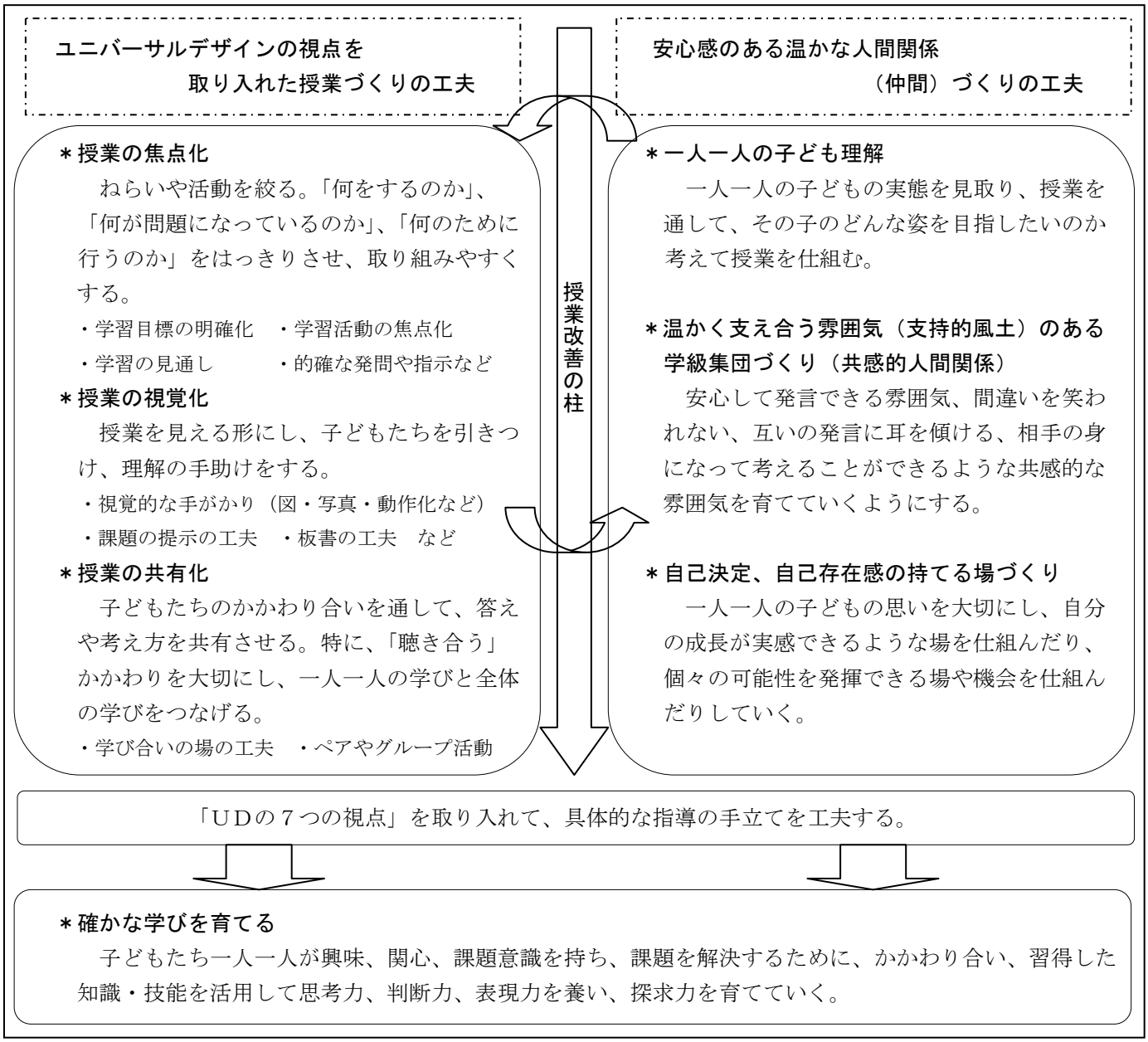


図４－２－１　西根小の研究構想

② 授業の実際

ア １年生算数の授業 ～単元名 かたちづくり～

１年生は、学習に対する意欲があり、積極的に取り組むことができる子どもが多い。しかし、読み書きや数に対する興味・関心が薄く、読み聞かせや数を数える体験などが不足しており、個人差が大きい。発表では、積極的に発言しようとする子どももいるが、自分の考えに自信が持てず消極的な子どもも見られる。

そこで、学級担任は、１年間を通した授業づくりのテーマについて、１年生で目指す授業の姿を子どもたちと一緒に考えた。そして、「自分の考えを持つこと」と「友だちとみんなで授業をつくること」を合わせ、授業テーマを「ひとみきらきら みんなできらきらタイムをつくっていこう」とした。授業に体験や操作活動を取り入れ、まず自分なりにやってみる体験を積み上げ、みんなでかかわり合いながら授業をつくっていきたいと考えた。

本単元は、色板、棒、ジオボードなど、いろいろな素材を使って図形を構成する活動を経験させることにより、図形に関する関心を深めていく学習であった。本時では興味を持って活動に取り組ませることにとどまらず、図形について様々な発見を促していきたいと考えた。

(ア) 本時で取り入れた「ＵＤの視点による手立て」

ａ 課題と算数的活動を絞る－授業の焦点化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」④より）

単元を「自由に色板を並べる活動」と「条件を与えて間口を狭めて色板を並べる活動」に分けて計画した。本時は、後者に取り組み、前半と後半に一つずつ算数的活動を設定した。前半は、指定された１枚の色板を動かす条件、後半は、自分で選んだ色板を動かす条件で考えさせた。

本時の課題と算数的活動を絞ることで、全員が同じ課題意識を持ち、共通体験としての算数的活動を通して学びを深めることができた。あまり操作が得意ではない子どもも含め、全員がどんな操作をしていけばいいのかを理解して学習に取り組むことができた。

ｂ １時間の学習の見通しを持たせる－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」①より）

集中が続かない子どもだけでなく、学級全員の意欲を引き出すため、黒板の隅に簡単な学習の流れを貼って、授業の終わりまでの見通しを持たせた。どんな順番で学習が進んでいくのか、わかりやすい短い文章で書かれていた。

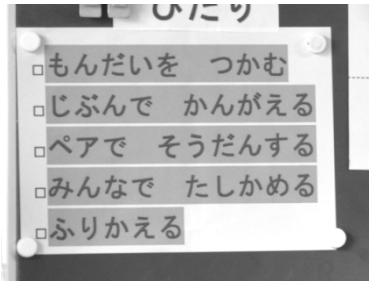


図４－２－２
１時間の学習の見通し

ｃ 色板を整理して貼った板書－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅵ「板書、ノートやファイル」④より）

授業の流れの中で、教師用の色板や子どもたちが発表した色板を、黒板に見やすく整理して貼った。また「はじめの形」と「動かしてできた形」を比較できるように並べたり、動かす色板の色を変えたりした。

話し合いでは、色板の動かし方を言葉で説明する子どもの様子が見られた。色板を見やすく貼った板書は、色板の動かし方の理解を助けるとともに、色板を真似してつくろうとする子どもの手本になった。

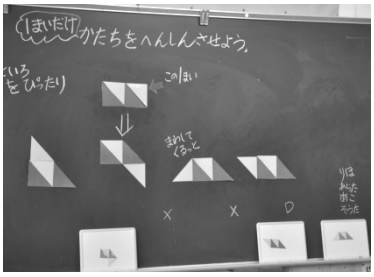


図４－２－３
色板を整理して貼った板書

ｄ 自分の考えを伝え合う場の設定－授業の共有化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」⑥より）

まず自分で取り組ませて一人一人に自分の考えを持たせた上で、ペアで相談させたりわか

ったところまで伝えさせたりできる場を設定した。互いにそれぞれの色板の動かし方を発表し合い、自分の考えを理解してもらったり足りなかった部分を補ったりした。

さらに発表も、そのペアで協力して行わせることで、一人では自信のない子どもも前に出て、活発に発表する姿が見られた。自分の考えだけでなく、友だちはどの色板をどのように動かしたかに目を向けさせ、学級全体の学びの共有化を図った。

図４－２－４
ペアで発表し合う

イ　２年生学級活動の授業　～題材名　友だちはっけん　構成的グループエンカウンターを用いた学級づくり～

２年生は、１年生からの持ち上がりのため、ある程度友だちにどんな接し方をしたらいいか理解しており、思いやりのある行動や困っている友だちに進んで声をかける姿が見られる。反面、考えや思いが言えるようになってきた分、トラブルも起こり、子ども同士ではうまく解決できない場面も出てきている。

そこで、学級担任が、１年間を通した授業づくりのテーマとして「目指す授業の姿」をみんなで考えようと投げかけたところ、「みんなでわかるとうれしいな」にまとまった。１年生のときから、一人でわからないこともみんなで考えたり教え合ったりしてわかる楽しさを味わってきている。一人一人が主体的に学ぶ姿勢を持ち、「自分でもできること」、「友だちと一緒にできること」を頑張っていくというテーマで取り組むことにした。

本題材を、自分のいろいろな面をみんなに紹介し知ってもらうことで、友人関係の幅を広げ、今まで話したり遊んだりしなかった友だちに親しみを感じることができるきっかけ作りにしたいと考えた。本時は、構成的グループエンカウンターを取り入れた活動を設定した。

(ｱ)　本時で取り入れた「ＵＤの視点による手立て」

ａ　活動の仕方について見通しを持たせる－授業の焦点化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」④より）

事前に書かせた自己紹介カードをグループごとに見回りながら、誰が書いたカードかを当てる活動を設定した。自分で取り組めるようにするため、活動に入る前に、活動内容の説明と確認を行って「何とかできそうだ」という思いを持たせた。活動のめあてやルール（ペア同士だけ相談可。活動時間１５分間など）、解答用ワークシートなどを掲示し、担任が端的でわかりやすい話し方で伝えた。

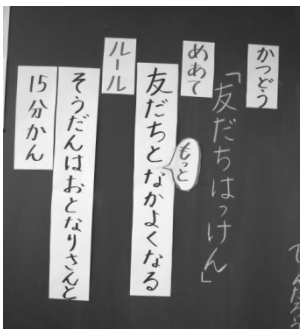


図４－２－５
活動のめあてとルール

ｂ　１時間の学習の見通しを持たせる－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」①より）

授業の初めに、学習の流れを黒板に貼って知らせることで、子どもたちの意欲を持続させ、学習に取り組めるようにした。今やっている活動に赤いマグネットを移動させて、活動の経過を視覚的に知らせた。活動の区切りに、次の活動や終わりまでの見通しを持たせることで、集中力を喚起した。

ｃ　自己紹介カードや解答ワークシートを工夫する－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」③より）

大きな枠取りで書きやすい自己紹介カードや解答ワークシートを作成した。カードの内容を、事前に自分のどんなことを知ってもらいたいか話し合って決めておいたため、本時の活動での意欲が高まった。

ワークシートには、記入例と学級全員の名前の一覧が印刷してあり、学級の友だちの名前の書き漏れがないようにする配慮が見られた。裏面には、答え合わせの際、発表が苦手な子どものために、自分で発表する言葉をメモできる欄を設けた。その結果、ほぼ全員が友だちを当て、全員が上手に発表することができた。

ｄ　自分の考えを伝え合う場の設定－授業の共有化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」⑥⑧より）

わからないときに聞ける安心できるペアをつくって活動させた。授業の振り返りでは、自分でわかったことや感じたことを発表させ、ペアで助け合ったりルールを守ったりしている場面を認め、全体に広げた。

また、一人一人が話す場を設けたいと考え、発表しやすいように発表の話型を掲示した。聞く側が話している友だちの話をうなずきながら聴く様子が見られた。

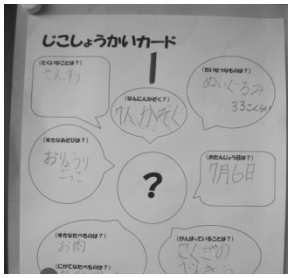


図４－２－６
活動意欲を高めた自己紹介カード

図４－２－７
うなずいて友だちの発表を聴く

ウ　３年生社会の授業　～単元名　店ではたらく人～

３年生はクラス替えがあったが、低学年から学年での学習をたくさん行ってきており、程良い緊張感の中でスムーズなスタートができた。授業では、課題に対して一生懸命に取り組む子どもが多く、特に、新しくスタートした社会科では、意欲的に学習する様子が見られた。

１年間を通した授業づくりのテーマは、「元１組と元２組のいいところを合わせてパワーアップしたい。」という子どもたちの思いから、「きらきらの実をそだてよう」と決定した。学級担任は、「一人一人がきらきらと輝くように頑張ることはもちろん、みんなの力がないときらきらの実になれない。みんなできらきらの実を育てていこう」、「みんなといると、あったかくて元気が出るな、勉強が分かって楽しいな。」と思えるような授業を目指した。

本単元では、地域の商店など販売の仕事の特色や工夫について調べ、自分たちの生活と関連付けて考え、わかったことをまとめる学習を行った。スーパーマーケットやコンビニエンスストア、その他商店街にある専門店などについて、それぞれの店の違いと良さ、店が消費者の願いに応えるために様々な工夫をしていることに気づかせたいと考えた。

⑺　本時で取り入れた「ＵＤの視点による手立て」

ａ　スーパーマーケットとコンビニエンスストアを比較して課題を引き出す－授業の焦点化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」③④より）

導入で、前時まで学習していたスーパーマーケットと、本時で取り上げるコンビニエンスストアについて、それぞれ大まかに特徴を比較した。そこから「なぜ、たくさんの人がコンビニエンスストアに買い物に行きたくなるのだろう。」という課題につながる疑問を抱かせ、その秘密を探りたくなるような強い動機づけを行った。

図４－２－８
スーパーマーケットと
コンビニエンスストアの比較

ｂ　店の資料の提示、学習シートと付箋紙の活用－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」①③より）

店の広告、店内の見取り図や写真、地区内の店マップなどの資料を準備し、黒板や教室の壁面に掲示した。実際に子どもたちが観察したり調べたりした内容も資料にして、いつでも店の工夫や秘密を振り返り、学習の手がかりにできるようにした。

学習シートには、店内の見取り図を印刷し、工夫や秘密を見つける際のヒントとした。見つけた内容は付箋紙に書かせ、シートにどんどん貼らせていく形をとり、調べ活動を活発にした。「必要な分だけ付箋紙をもらってよい」、「友だちと自由に交流してよい」などのルールも、書きたいという思いを強くした。付箋紙がたくさん貼られたシートは、友だちがどれくらいの工夫や秘密を見つけたのかが一目でわかり、グループ交流を活発にした。

図４－２－９
学習シートと付箋紙の活用

ｃ　ペアやグループの交流－授業の共有化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」⑥より）

一人学習では得られない安心感を与え友だちと考えを伝え合う力をつけたり様々な考え方を学んだりすることができるように、ペアやグループの交流などの場を設定した。早く活動が終わった子どもはミニ先生になり、友だちのわからないことはみんなで解決していこうという学級の雰囲気が感じられた。

図４－２－１０　ペアでの交流

ｄ　発表の仕方や聴き方を意識させる－授業の共有（ＵＤの視点Ⅱ「学習や生活のきまり」①より）

「○さんと同じで～です。」、「○さんと違って、～な工夫を見つけました。」、「ぼくは、～と思います。○○さんはどう思いますか。」などの話型を用い、友だちを意識しながら自分の考えを発表できるように指導した。また、わからなかった子どもやあまり見つけることができなかった子どもを先に発表させることで、あまり手を挙げられない子どもの意見も共有していけるように、発言の指名の仕方に配慮した。

エ　４年生国語の授業　～単元名　新聞のとくちょうと作り方を知ろう～

担任が替わって、５月に１年間を通した授業づくりのテーマについて話し合いをした。３年のテーマを想起させて全員の意見を聞き、一人一人の思いを合わせて、授業テーマ「心で聴いて意見をつなげ、仲間になろう」ができた。

子どもたちは、発言者の方に体を向けたり、うなずきながら聴こうとしたりするなど、３年までに教わった、聴く上で大切なことを実行している。学級担任は、「仲間になること」をテーマに掲げ、より真剣に友だちの話を聴こうという意識を高めたいと考えた。また、授業を「単に学力をつけるだけではなく、失敗や感動などを共有することで、教師と子ども、子ども同士のつながりを深くする場」と捉えた。自然に集中したくなるような学習の積み重ねを通し、「みんなと考えることが楽しいから集中してテーマに迫りたい。」という子どもを育て、「いい仲間になれたね。」と言い合えるような学級づくりをしたいと考えた。

本単元では、新聞の特徴や作り方について学び、新聞をつくる学習をした。本時は、記事に合う見出しのつけ方を考えた。言葉を生み出すことは大変だが、子どもの表現を大事に評

価し、初めて取り組む新聞づくりが楽しいものになるようにしたいと考えた。

⑺　本時で取り入れた「ＵＤの視点による手立て」

ａ　自力で書く前に、全体で見出しを検討し、いい見出しのポイントを探る－授業の焦点化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」④より）

記事に見出しをつける前に、教師が作成した「浄水場の記事」と「３つの見出しの例」を提示し、どれが記事に合う見出しか、比較・検討させる話し合いをした。３つのうち２つは、「記事の内容がよく伝わらない見出しの例」で、１つは「記事の内容の中心がはっきりして、内容が一目でわかる見出しの例」だった。そこから、「文に合うように」、「一つのことに目をつけて」、「短く」など、子どもの発言を活かした言葉で「いい見出しをつけるポイント」をまとめた。

その他、日頃担任が行っている言葉の生み出し方のアイデア（一つ浮かんだら一つ書き出すと、次のもう一つを考えつきやすいなど）も紹介した。

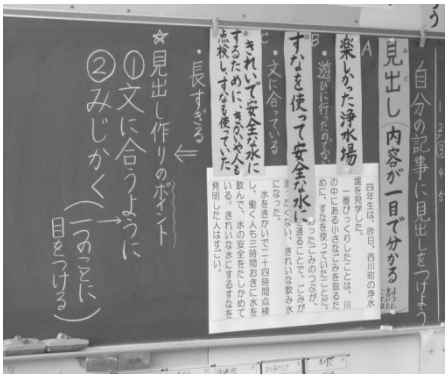


図４－２－１１
新聞の見出しの比較・検討

ｂ　資料はできるだけ大きく見やすく子どもの考えた言葉は大きく板書－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅵ「板書、ノートやファイル」①②④より）

黒板に提示する記事や見出しなどの資料は、できるだけ大きく見やすい文字にした。子どもの手元にも黒板と同じ資料をプリントで配り、言葉や文章を正確に読めるように配慮した。

子どもの発言などの大事な言葉は、他の文字より大きく板書するなど、板書にめりはりをつけた。その他、大事な内容がわかるように画用紙や模造紙を使い、板書の構成を工夫した。

ｃ　前時の学習を本時の学習プリントに活かす－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」③より）

学習プリントの紙面の中に、前時に書いた記事を貼りつけるスペースを設け、記事の近くに見出しを書くことができるようにした。書いたプリントを友だちと読み合うときに、見出しがその記事の内容に合っているかどうかを見て判断しやすい学習プリントとなっていた。

ｄ　同じ見学場所の記事を書いた子ども同士の交流－授業の共有化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」⑥より）

書いた記事や見出しを発表する際は、近くの席の子ども同士ではなく、同じ見学場所の記事を書いている子ども同士で交流させた。同じ場所に行っても、見方・感じ方が異なると記事の中心も異なり、それと同時に、見出しの言葉も異なってくるという教師の考えだった。読み合う活動を通して、互いの良さを認め合いながら相互評価を行わせていた。

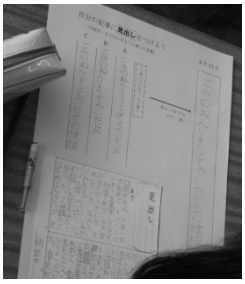


図４－２－１２
前時と本時をつなぐ学習プリント

図４－２－１３
グループで読み合う活動

オ　５年生算数の授業　～単元名　分数～

４月にクラス替えをし、新しい仲間と新しい学級をつくっていこうと、意欲的な様子が見られた。学習に対しても、真面目に一生懸命に取り組もうとする子どもが多い。しかし、発表では、考えに自信が持てず、間違いや失敗を恐れるなど、消極的な子どもも見られた。

１年間を通した授業づくりのテーマについて「目指す授業の姿」を決める話し合いでは、一人一人が授業について真剣に考えている気持ちがよく伝わってきた。全員が納得して決まった授業テーマは、「心」…笑顔いっぱいの心（E）、話を聴く心（H）、進んで学ぶ心（S）、失敗をおそれずたくさん伝える心（S）となった。学級担任は、学級の仲間と同じ課題に向かい、安心感のある中で学習をし、課題を解決したときには「みんなで笑顔」、そんな授業を目指していきたいと考えた。

本単元では、約分や通分の意味とその仕方の理解、異分母分数の加減計算と整数による乗除計算について学習した。本時は、言葉、図や数直線などを用いて根拠を明らかにした計算の仕方の説明ができるように、また、互いに聴き手を意識しながら発表し合い、より考えを深めていくことができるように指導していきたいと考えた。

⑺　本時で取り入れた「ＵＤの視点による手立て」

ａ　自力解決に入る前に、思考の手がかりを持たせる－授業の焦点化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」③④より）

導入で、前時の同分母分数の加法について復習した後、本時の課題につながる異分母分数の加法の式を提示した。全員が自力解決に取り組めるようにするため、どのようにすれば解けそうか、考えを出させて全体で確かめた。

図４―２－１４
異分母分数の加法の計算

その際、教師が異分母分数の分母と分子をそのまま足して、それに対する子どもたちの反応を引き出そうとする場面があった。ほとんどの子どもが間違った計算の仕方であると反応したため、液量図を用いて確認を行った。そこから、異分母分数の加法は、「共通な分母の単位にそろえることによって、正しく計算できるのではないか」という思考の手がかりを持たせ、自力解決に取り組ませた。

ｂ　液量図や数直線図で理解・表現する－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」①より）

ジュースの量の分数を液量図を用いて表し、問題の意味や分数の大きさについて視覚的な理解を図った。液量図にはラミネートがかけられ、ペンで目盛りを何度も書き換えられるような工夫が見られた。また、子どもたちにも液量図を用いて説明できるように声がけした。

教室の壁面には、既習事項である「大きさの等しい分数の数直線図」が掲示されており、それを見て振り返っている子どももいた。

ｃ　板書とノートを対応させる－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅵ「板書、ノートやファイル」全般より）

黒板を左右に分割し、それぞれノート１ページ分に対応させていた。また、板書の１行分の文字数を調整し、大きな文字で書き、ノートに取りやすい配慮がなされていた。

文字のチョークの色には黒板に映える白を使い、その他の色チョークは強調したい場合に使った。子どものノートでも同じ色使いが見られた。

また、１時間の学習の見通しで示した「課題」、「まとめ」などの言葉をマグネットシートに書いて貼り、ノートとともに学習の流れがわかりやすい板書構成の工夫が見られた。

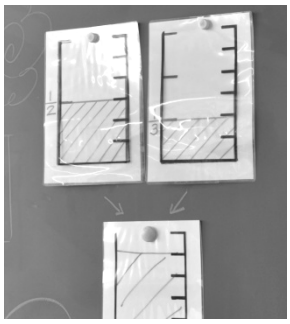


図４－２－１５　液量図の掲示

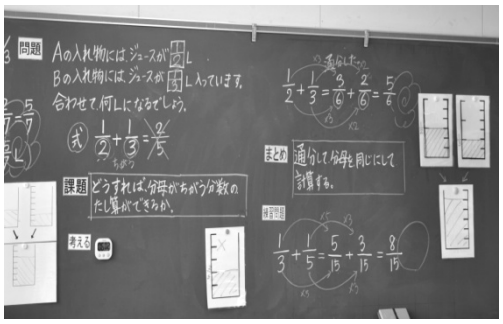


図４－２－１６　板書とノートの対応

ｄ　学び合う場をつくるー授業の共有化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」⑥⑧より）

全員での思考を深めるために、近くの子ども同士で交流をし、自分の考えを友だちに説明したりアドバイスしたりしていた。答えだけでなく根拠を添えて、できるだけ友だちが理解できるような言葉を選んで説明させた。

話し合いでは、他者説明を取り入れ、友だちの発表をよく聴かせ、学びの内容の共有化を図ろうとした。子ども同士で意見をつなぎながら話し合いが進んでいく様子が見られた。

最後の振り返りの場面では、「～な考え方をすれば解けることがわかった。」、「～が勉強になった。」など、具体的に学んだことについての発言が聞かれた。

カ　６年生社会の授業　～単元名　長く続いた戦争と人々のくらし～

学級担任は、最高学年となった２８名と昨年度の授業を振り返り、どんな授業テーマにしたらいいかを考えた。今年は、昨年と同様、みんなとつながり合った授業をしたいという子どもたちの願いや、卒業を意識してか、まとまりのある学級をつくりたいという思いが強く出た言葉が多かった。それは、もっと授業の中で互いのよさを引き出し合えないものだろうか、という学級担任の思いとも重なった。身近にいる仲間とかかわり合い、頼りにし合えることで、「みんなでわかる楽しさ」が共有される。それが成立する授業をしていきたいと考えた。１年間を通した授業づくりのテーマは、「強い絆＋笑顔＝チーム６の１」となった。

本単元は、日中戦争、日本に関する第二次世界大戦、その頃の国民生活に関心を持たせ、資料を活用し、戦争の広がりや戦争がもたらす影響について、子ども、国民、戦場となったアジアの人々など様々な立場から多面的に捉えさせていく学習であった。これまでの国語の教材「ちいちゃんのかげおくり」（３年）、「一つの花」（４年）、「『平和』について考える」（６年）などで戦争のもたらす影響は知っているものの、予備知識を持っている子どもは少ない。ＵＤの視点を取り入れて、よりみんながわかる授業づくりを目指していきたいと考えた。

⑺　本時で取り入れた「ＵＤの視点による手立て」

ａ　学習内容を整理するワークシートの活用ー授業の焦点化（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」③より）

教科書の学習内容を整理するワークシートを用いることで、話し合いの目的を明確にした。日本がアジアや太平洋に戦場を広げながらアメリカやイギリスなどと戦った戦争の様子やその理由について考えさせるための手立てとして活用した。

ワークシートの吹き出しには、戦争を広げた政府の人々の考え、巻き込まれた韓国の人々、兵士として見送られる人々の思いを考えて書かせた。

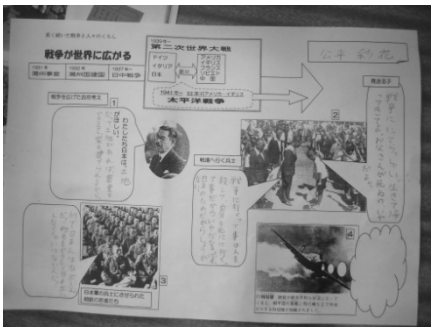


図４－２－１７
学習内容を整理するワークシート

ｂ　拡大した資料の提示－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅳ「教材・教具」①より）

拡大した写真や地図が、とても興味を引く資料の提示となった。導入では、「東南アジアを占領する日本軍」の写真を提示し、本時の課題に結びつく子どもたちの気づきを共有した。いくつかの写真や資料はワークシートに印刷し、子どもたちに配付した。資料に関するたくさんの発問があったが、どの子どもからも手が挙がり、自分の気づきを発表していた。

ｃ　資料を中心にしたわかりやすい板書－授業の視覚化（ＵＤの視点Ⅵ「板書、ノートやファイル」全般より）

戦争の広がりとその理由について考えさせる場面では、「戦場になったアジア、太平洋の地域」の地図を拡大したものを黒板の中央に掲示した。地図から気づいたことや考えたことを話し合わせ、関連する教科書の文章を読み取らせて学習を進めた。板書には、日本が、中国からさらにアジアや太平洋へと戦争を広げていき、またヨーロッパの国々でも戦争が広がっていったことについて、カードを用いて整理した板書の構成が見られた。

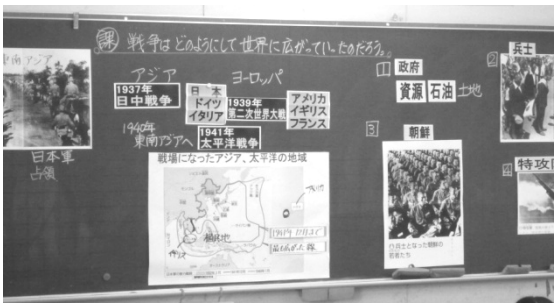


図４－２－１８
拡大した写真や地図で構成された板書

ｄ　本時の課題に迫るための発表のさせ方－授業の共有化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」⑤⑥より）

前半は、地図を見て戦争の広がり方について知りたいことや調べたいことを、まずペアで話し合わせてから発表させた。発言することをためらう子どもも、少人数では反応できると考え、ペアでの交流を取り入れた展開を組み入れて、互いに学び合える安心感を持たせた。

後半は、様々な立場の人々の思いをワークシートの吹き出しに書き込ませてから、列ごとに発表させた。発表の前に、戦争の歴史的背景や世界情勢、当時の日本の状況、人々の立場の違いなどについて、一人一人に自分の考えを持たせることで、全員が本時の課題に迫ることができるよう学習を進めた。

発表の際は、仲間の発言につなげたり言い換えたりする意識を持たせ、多面的な学びの広がりを図った。

図４－２－１９
資料を見て意見を発表する

③　ＵＤの視点を取り入れた授業実践の成果

ア　校内研究の進め方について

授業研究会は、毎回２つの学年の学級担任が授業を実施した。事後研究会では、２つの分科会に分かれ、ＫＪ法を用いたワークショップによる話し合いを行った。

協議では、授業の「焦点化」、「視覚化」、「共有化」の３つの柱にそって、「ＵＤの視点による手立て」が子どもたちの学びに有効であったかどうかなど、活発な話し合いが行われた。

模造紙には、事前に、３つの柱の枠を書き、授業公開シートを印刷し貼った。また、類型化しやすくするために付箋紙を、成果と課題で色分けした。直接ペンで見出しなどを書き込むなど、グループごとに話し合いの内容がわかりやすくまとめ、短時間で内容の濃い事後研を行った。

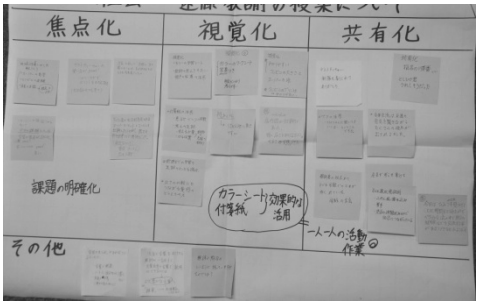
１年生から６年生まで、各学級で取り入れた「ＵＤの視点による手立て」については、以下のような傾向が見られた。

授業の「焦点化」の観点では、主に、ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」に関する内容などが多かった。導入、課題設定、自力解決の過程において学習内容や方法などを絞り、着実な学びをつけたいというねらいが見られた。

授業の「視覚化」の観点では、ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」の１時間の学習の流れの見通し、ＵＤの視点Ⅵ「板書、ノートやファイル」の板書の構成、ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」のワークシートの活用などに関する内容などが多かった。視覚的にわかりやすく支援したいというねらいが見られた。

授業の「共有化」の観点では、主に、ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」のペアやグループ交流、ＵＤの視点Ⅱ「学習や生活のきまり」の聞くことや話すことなどに関する内容などが多かった。一人一人の子どもの学びと学級全体での学びを目指したいというねらいが見られた。

この他、西根小の授業改善の柱である「安心感のある温かな人間関係（仲間）づくり」の工夫」（図４－１－１）に関する手立てが、話し合いのきまりやかかわりの場の設定などにおいて、どの学級の授業にも見られた。これは、ＵＤの視点でいえば、Ⅲ「関係づくり」にあたる。授業の中で、学級経営や生徒指導がしっかりと意識され、指導されていた。



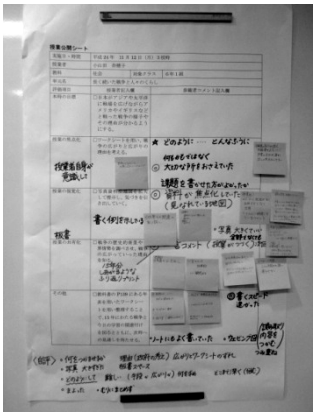


図４－２－２０
ワークショップ型事後研究会の様子及び成果物

イ　児童に見られた変容

以下、アンケート形式で各教員から記入してもらった記述部分の回答から一部を抜粋した。

＜主体的に学ぶ姿へ＞

・わからないことがわかり、できないことができるという満足感を子どもの表情から感じる。
・やれるという思いを持たせられるようになったので、子どもが集中して意欲的に学習に臨むことができるようになった。
・低位の児童に目を向けることが増え、以前より丁寧にかかわるようになった分、子どもたちも頑張れるようになってきたと思われる。
・次の活動を確認できるようになり、時間のコントロールもできるようになった。
・授業の流れを示したり、色別にして活動内容を示したりすることで、次に何をするのかが目で見てわかり、子ども自身が見通しをもって動けるようになっていると思う。
・授業の流れを示すよう心掛けていたら、「今日はどんなメニューですか。」と、子どもたちの方から聞いてくるようになった。主体的な姿が見られるようになってきたかなと感じる。

＜より具体的に学ぶ姿へ＞

・「わかりやすい」ということを念頭に置き、視覚刺激を与えることをより意識するようになった。子どもたちも写真や図をよく注意して見るようになった。
・教師の教え方が具体的になったので、子どもたちの考え方も具体的になったように思う。例えば、子どもから「５分前行動をするためには、頭の中で放送して早めに行動するとよい。」という言葉が出て感動した。
・運動面、集団行動面で頑張れる子が多くなった。

ウ　教員の感想や意見

以下、アンケート形式で各教員から記入してもらった記述部分の回答から一部を抜粋した。

＜ＵＤの視点を「意識」すること＞

・「すべての子がわかる授業」ということを意識するようになった。
・ＵＤの視点を意識して日々の授業の中に取り入れることで、よりわかりやすい指示･発問を考えたり、授業の構成を考えたりするようになった。そのために、より一人一人の子どもたちを見取ろうと意識するようになった。
・７つの視点は、日頃自分を点検するのに役立つ。不足している部分を意識できる。
・どの子どもも学びに参加するためという視点で研究することができてよかった。日頃の自分の授業を振り返るいい機会でもあったと思う。意識することが大切だと思った。
・教科のねらいに近づくためには、より深い教材研究をしなければならない。実際はなかなかできずにその日に流されてしまう日々だが、ＵＤの視点は指導･支援の原点であり、最も大切なことだと思う。それを意識するかしないかで大きく変わってくると思う。これから学校を異動しても校内研究でなくても、自分自身の指針として取り入れていきたい。

＜ＵＤの視点を取り入れてみて＞

・ＵＤについて全体の共通理解を図ったことで、研究を進めることができた。
・視点が明確なので取り組みやすかった。全員が達成できるとやはりうれしい。
・子どもの実態を考え、その実態に応じた指導を心掛けてみた。
・「よりシンプルに、わかりやすく」という視点で授業を構成していくことはとてもやりやすい。わからない子どもたちにとって、課題解決に向け、根拠をもった話し合いをさせることに無理があり、理解につながるとは言えないからである。
・ＵＤの視点に対して構えることなく、普通にできていたことを確認していけたらよい。
・教材研究や授業づくりが楽しくなった。

以上、記述部分の回答では、先生方が概ね「ＵＤの視点を取り入れた授業づくり」の取組みを評価していることがわかる。当初は、７つの視点や項目をどのように取り入れていけばいいか、校内研究にどのように活かしていけばいいかなど、疑問点もあったと思われるが、実際の授業実践を経て、先生方から、ＵＤの授業づくりの重要性を表す感想や意見が得られたことはとても意義深い。西根小は、これまでの校内研究を通して、すでに「ＵＤの７つの視点」の中でも土台となる「学級づくり」を基盤とした授業づくりの考え方が根づいていた学校であった。そのため、このたびの取組みは、より一層校内研究の基礎を固め、さらに今後の研究の充実を図るためのステップになったのではないかと考える。今後も、ＵＤの視点を意識し、子どもの実態に応じた授業づくりの大切さを共有し合い、すべての子どもたちに確かな学びを育てる実践を重ねていただきたい。

⑵　教科ごとの特性に合わせたＵＤの授業づくり　～米沢市立南原中学校～

①　授業づくりの特色

南原中学校では校内研究において、研究主題「学びの質を高める指導法の研究」を設定し、さらに平成２２年度からサブテーマを「活用場面を通して習熟を目指す授業づくり」として、授業改善を柱とした取組みを行ってきた。これまでの研究の結果、生徒の学習の様子として、既習事項を活用して問題解決しようとする姿が見られるようになった。さらに、思考場面で個人からグループへの活動という流れを繰り返し行う中で、他者の意見を聞きながら思考を深めようとする姿が見られるようになった等の成果が得られた。

しかし、その反面、習得が不十分な生徒も見られ、習得させるための工夫や時間の確保が必要であることや、授業の中で、間違いを恐れず、ともに学び合える雰囲気づくりを行う工夫をしていく必要性が挙げられた。

今後の校内研究を進めるにあたり、柱となる取組みはこれまで同様に進めることとした。そして、授業づくりにおいて大事にしたい「ＵＤの７つの視点」を活用した手立てを意図的に取り入れていくことで、具体的な授業改善の方法としていこうと考え、ＵＤの授業実践に取り組んだ。

ＵＤの授業実践については、国語と美術の２教科の中学校教員免許を持っている教員が、異なる教科の授業に取り組んだ。ＵＤを取り入れた授業実践の報告例では、中学校の実践例は決して多くはない。その中で、教科ごとの特性に合わせたＵＤの授業づくりの在り方について探る取組みだった点と事前研究会、事後研究会において多くの教員で検討を行った点に意義深いものがある。

生徒の実態把握から始め、同僚からの情報やＮＲＴなど、さまざまな情報を集めてＵＤの視点を取り入れた授業づくりを行った。また配慮を要する生徒については、個別の支援（第二次支援）も準備した。ＵＤの視点の項目から、学級の生徒の実態に合うものを選び、工夫や手立てを考え授業のねらいを達成しようとした。指導案には、そのことを明示し、事前研究会や事後研究会では、授業公開シートを活用したワークショップ型の話し合いを持った。

時間	学習活動　○主な発問・指示	・指導上の留意点　△予想される生徒の反応 ★ＵＤの視点を取り入れた手立て
導入 ５ 分	１「ひまわり」を見る。 ○誰の作品でしょう。知っていることは？ ２　Ａ「馬鈴薯を食べる人々」Ｂ「日本趣味・梅の花」Ｃ「アルルの寝室」がゴッホの作品であることを知る。 ３　本時の課題を知る。 課題：なぜ、作風が違うのか、それぞれの絵からゴッホを感じて想像してみよう。 ・なぜ違うのか、今の時点の自分の考えを書きましょう。	・プロジェクターを使用し、大画面で映し出す。（★Ⅶ-①） ・多くの生徒が知っている作品なので、生徒の言葉を引き出す。 ・ゴッホの名前が出ないときは提示する。 △全然ちがう。見たことある。
展開 ３８ 分	４　なぜ作風が違うのか３枚の絵を鑑賞しながら推察していくことを知る。そのときの話し合い活動の流れを確認する。 ５　ＡＢＣそれぞれの絵をグループに分かれて鑑賞する。	・視覚的な提示の仕方を工夫しわかりやすくする。 ・鑑賞の視点を示す。（★Ⅳ-①④） ・交流の手がかりを示したワークシートを準備する。（★Ⅶ－④） △Ａ：ゴッホは貧しいけれども必死に働き生きる

図４－３－１　指導案に示されたＵＤの視点による手立て（太枠内）

②　授業の実際

ア　２年生国語の授業　～単元名　「やさしい日本語」～

外国人にもわかりやすい日本語とはどのようなものなのか述べている説明文を、三

段構成で捉え、段落や文の中で全体と部分の関係をつかませる授業であった。

生徒理解及び国語に関するレディネスについては、同僚からの聞き取りと昨年度末に行ったＮＲＴの結果から把握した。自分一人の力で考えることが苦手で、思考の場面で集中力が続かない生徒、他の生徒の考えに頼ってしまう生徒がおり、ＮＲＴの結果から、学級内での正答率の開きが大きく、学力差が広がっているという情報を得た。

そこで、個人で思考する場面と他の生徒と交流して自分の意見を確かなものにする場面の両方を設けた。単元構成を工夫し、前時に学習したことを活かして本文の読みができるようになる展開を繰り返すことで、すべての生徒の考えを引き出し全員が参加できる授業づくりを目指した。

⑺　本時で取り入れた「ＵＤの視点」による手立て

ａ　ペアの学習形態の工夫（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」⑥より）

ペア学習を設定して、授業の中で一度は自分の意見を発表する機会をつくり、初発の意見交流を通して、自分の考えに自信を持たせようとした。

本時では、段落を大きく３つのまとまりに分ける課題について、個人で考える場面とペアで交流する場面を設定した。まず導入で、本時の学習活動の流れをホワイトボードで提示し確認した後、個人で考える場面で自分なりの分け方を考えさせた。

その後のペアでの交流では、普段の授業であまり自分から発言しない生徒たちや自分の考えに自信が持てずにいた生徒に、友だちの考えを聞くことによって自信を持って話し合う姿が見られ、全員が話をすることができた。

図４－３－２
考えに自信を持たせたペア学習

ｂ　学級全体の学びをつくる発問や教具の工夫（ＵＤの視点Ⅴ「教師の話し方、発問や指示」②、Ⅶ「教材・教具」①より）

机間指導から生徒の状況を把握し、意図的な指名を行い学級全体の学びへとつなげた。また、実物投影機で生徒のワークシートを映し出しながら発表させ、聴くだけでなく視覚的な理解を深められるようにした。全体の段落の中での段落ごとのつながりや、発表者による分け方の違いを捉えやすくしようとした。

図４－３－３　机間指導

図４－３－４　実物投影機の活用

ｃ　既習事項が目でわかるモデル図の工夫（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」①より）

既習事項である説明的文章の三段構成をモデル図にして黒板に提示した。また、提示内容と同じものを生徒個人にもプリントに印刷・配付して学習を進めていた。

生徒は必要に応じて、モデル図を見ながら既習事項を確認しながら、学習を進めた。

ｄ　ワークシートの工夫（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」③より）

授業の流れと対応したレイアウトのワークシートを用いて、三段構成の段落のまとまりを視覚的にわかりやすいものにしようとした。

また各段落の要約文を書く際に、全２２段落を表組みしたワークシートを準備して、簡潔に書きまとめられるようにし、時間短縮を図った。各段落の要約文を表にまとめることで、段落ごとのつながりを捉えやすくしようとした。

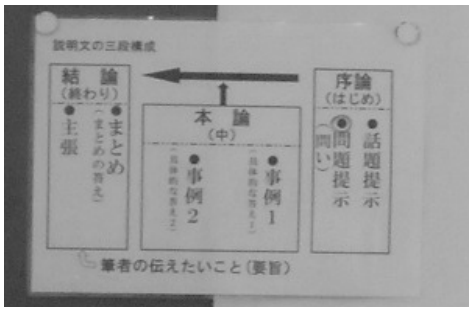


図４－３－５
既習事項を示した図

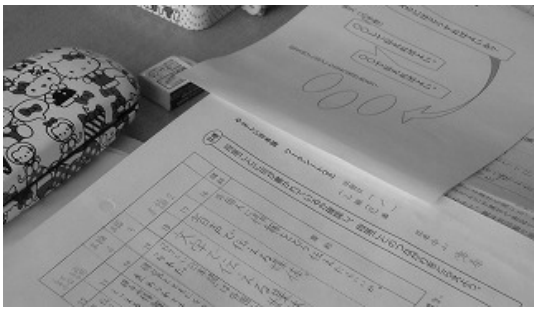


図４－３－６
全段落を表組みしたワークシート

イ　３年生美術の授業　～単元名　「ゴッホを感じよう（鑑賞）」～

３種類のゴッホの作品を鑑賞することで、それぞれの表現の違いや作者の心情や意図を考えさせ、ゴッホの創造的な表現の工夫を感じ取らせる授業であった。

この学級の生徒は、美術に関して興味を持ち熱心に取り組んでおり、特に鑑賞の授業について、興味関心が高く、美術作品との出会いを楽しみにしている生徒が多いと捉えた。しかし、自分の考えを持つことができず、他の人の考えに合わせてしまう生徒もいるため、生徒一人一人が作品から感じたことを、自分の言葉で表現し伝え合い、思考を広げていけるような授業づくりを目指した。

⑺　本時で取り入れた「ＵＤの視点」による手立て

ａ　鑑賞の視点を明確にする工夫（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」①、③より）

課題や活動の見通しを持たせる場面において、以下のような鑑賞の視点を示すことによって造形的な要素に着目して感じ取ったり、作品の全体的なイメージを捉えたりできるようにし、作品の良さに気づかせたいと考えた。

学習指導要領に示されている共通事項を意識した上で、感じ取ったりイメージしたりするための造形的な要素を大切にして鑑賞させたいと考えた。鑑賞の視点（色使い・輪郭線・筆のタッチなど）が与えられたことで思考しやすかったと感じている生徒が多かった。このことは、ワークシートに、低位の生徒もよく記入できていたことからもわかった。

ｂ　見やすい資料の提示の工夫（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」①より）

絵画作品は、スクリーンに拡大したものと、生徒にとって見やすいように手元におくものを準備した。プレゼンテーションソフトを用いて大きく作品を提示し、全員が同じものに注目した。また、一人一人に配付した作品の図版カードは印刷が鮮明できれいに仕上がったため、授業後には図版カードがほしいという生徒もいた。

図４－３－７　拡大した作品

図４－３－８　手元におく作品

ｃ　ペアやグループの学習形態の工夫（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」⑥より）

これまでの鑑賞の授業では、教師と生徒の一対一の問答形式になりがちだったことから、ペアやグループでの交流を仕組んだ。グループの話し合いの様子からは、自分から積極的に話せない生徒は聞き役で終わってしまうことが予想された。

そこで、全員が自分の考えを伝え、交流できるような活動を工夫した。まずペアからグループへと学習形態を変化していくことを予告して見通しを持たせた。熱心に個人での鑑賞を行い、ペアでの交流では、自分の考えに相手の考えを補足しながら聴き合う姿が見られた。

図４－３－９
ペアからグループの活動へ

グループでの交流では、異なる絵の鑑賞を行った者同士が交流し、自分の考えを他者に伝えた。伝えることが前提の活動になるため、個人での鑑賞も意欲的になり、多様な考えに触れ思考の広がりが見られた。授業後の生徒の評価からも、ペアからグループで交流することで、授業が活性化し思考が広がったことを読み取ることができた。

ｄ　鑑賞の視点がわかるワークシートの工夫
（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」③より）

鑑賞の視点がわかるワークシートを準備し、課題である「なぜ３枚の絵の作風が違うのか」を解決するときの手がかりになるようにした。

学級の実態に合わせたＵＤの視点を考える際にすべての生徒が活動できるようにするための手立てとして、ワークシートに、ヒントとなる要素を増やしていた。生徒も交流において役立ったと評価した。

図４－３－１０
鑑賞の視点がわかるワークシート

③　ＵＤの視点を取り入れた授業実践の成果

ア　校内研究の進め方について

授業研究会の参観においては、授業公開シートも配付され、さらに事後研究会にも活用された。事後研究会はワークショップ形式で行われたが、付箋紙を用いたＫＪ法ではなく、バズセッションの形式で行われた。教師が５人程度の２グループに分かれ、意見や感想を自由に発言していき、成果、課題、今後のアイデアの３点でまとめてい

た。その後、グループごとに報告がなされ、全体の学びとしていた。

イ　生徒に見られた変容

以下、アンケート形式で各教員から記入してもらった記述部分の回答から一部を抜粋した。

・３年生の低位の生徒の中に学習する意欲が見られる生徒が増えた。
・学習の手順や流れの板書は、生徒が学習に取り組む際、確認しやすく安心しているように思う。
・毎回できている訳ではないが、本時の流れを板書しているときは、生徒も活動にスムーズに取り組めているように思える。
・８月末からの少人数指導の導入が究極のＵＤ。落ち着いて問題演習を行えることができるようになってきた。

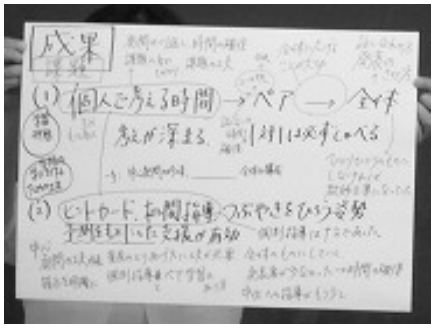


図４－３－１１
ワークショップ型事後研究会
バスセッションによる成果物

ウ　教員の感想や意見

・ＵＤの視点を意識することが、授業改善につながる。
・生徒が見えてきた分、指導がしやすくなってきた。
・視覚的な活動はとても効果がある。
・異なる教科でも、同じようにＵＤの視点を取り入れた授業づくりが可能だということがわかった。ただ、その教科の特性には留意が必要だと思った。
・視覚教材をうまく取り入れた研究授業を見て、めりはりがつき、生徒の活動が活発になる、イメージしやすくなる、記憶に残りやすくなると思った。
・なかなかよくばってできるわけでないので、やれる範囲で生徒の変容を確認しつつ少しずつスキルアップさせていけばいいのかなと思う。
・具体的なチェックポイントについて教師自身が振り返ることが授業改善につながると思う。チェックポイントが適切かどうかは今後も考えていかなければならないし、これだけやっていればうまくいくというものでもないだろう。
・特に大きな改善をするというのではなく、これまで気を使っていた部分を、もう一度見直してやってみようということだと思った。引き続き、必要性のある部分で気を使えるようにしていきたい。
・おそらく今までも生徒に応じて何気なくやっていたことでも、「ＵＤ」と意識するだけで違ってくるのだろうと感じた。今までのことを否定するのではなく、よかったのだと再確認できた。

以上の記述回答を見てみると、特に視覚的な工夫が生徒に与える効果を感じている教員が多かったようである。例えば、授業の流れや手順を先に示し、生徒に見通しをもたせることにより、安心して取り組む姿が見えたという声があった。また、「ＵＤの視点を取り入れた授業づくり」を取り入れる余裕がないという声もあったが、できるところからやってみようという感想も寄せられている。ＵＤの授業づくりは、実はこれまでも授業の基本とされてきたことでもあると振り返り、これからもより意識して授業づくりに活かしていこうという前向きな意見をいただくことができた。今回２つの提案授業を通して、中学校における教科担任制の中で、ＵＤの視点を参考に、教科を越えた校内研究の活性化を図ることができたことは、大きな成果といえる。今後も授業改善の方策に位置づけ、生徒一人一人の学びの質を高める指導法の研究を続けていただきたい。

⑶　同じ教科担任同士で取り組んだＵＤの授業づくり　～大石田町立大石田中学校～

①　ＵＤの視点を取り入れた実践の特色

数学を担当する教員２名が学校の研究テーマを基に、ＵＤの視点を取り入れた実践を重ねている。

大石田中学校では、「わかる、できる喜びを味わえる、魅力ある授業の創造」を研究テーマとして掲げ、研究を推進している。学びの主体が生徒であることを前提に、生徒の実態を踏まえ、生徒自身が必要感や有用感を感じられるようにする手立てを講じている。

研究の視点は、以下の２つである。

[視点１]見通しを持った単元構成の工夫（ねらいの具現化）
[視点２]教科の魅力を伝える授業づくりの工夫（課題設定や学びの形態）

本時のねらいを達成するための手立てとして、授業づくりにおいて大事にしたい「ＵＤの７つの視点」を参考にして、授業を進めている。

[視点１]の「見通し」、「単元構成」や「視点２」の「課題設定」、「学びの形態」については、すでに「ＵＤの７つの視点」の項目に重なるところがある。

まず、目指す生徒像、評価の方法（特に「関心・意欲・態度」の評価方法）について共通理解を図った。また、随時お互いに授業参観や教科部会を行い、授業改善に活かしていた。

互いの授業参観を行うにあたっては、指導案を作成せずに、「授業公開シート」を活用した。本時のねらいを達成するために取り入れた「ＵＤの視点による手立て」や「個別の配慮」について、授業後に話し合いの場を設定した。

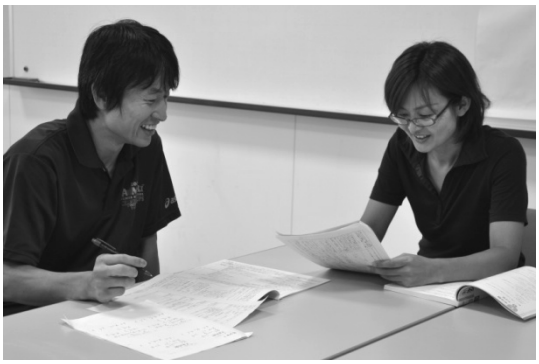


図４－４－１　教科担任同士の話し合い

単元名	２次方程式	
項目	授業者記入欄	参観者コメント記入欄
本時のねらいやポイント	□２次方程式の形を見て、因数分解の考えを利用できるかどうかを判断する。 □因数分解を利用して、２次方程式の解を求める。 □因数分解して解くことの良さを感じ取る。	
ＵＤ視点⑴関係づくり（Ⅲ－②）	□共同学習を通した関係づくり。	
ＵＤ視点⑵授業の構成（Ⅳ－⑥⑧）	□３人組、６人組、ペアなど、学習形態の工夫。 □「できた」「わかった」実感を持たせる学習活動とまとめの工夫。	
ＵＤ視点⑶板書（Ⅵ－②④⑤）	□視写しやすく、授業の流れがわかるような学習プリントの構成と板書との対応	
個別の配慮について	□個に応じた言葉がけ □個に応じたヒントの出し方	

図４－４－２　授業公開シートに示された「ＵＤの視点による手立て」と「個別の配慮」

②　授業の実際

ア　３年生数学の授業　～単元名　２次方程式～

真面目に学習に取り組む生徒が多い。男女ともに反応がよく、問いかけに対して間違いを恐れず発言したり、問題を進んで黒板で解いたりすることができる。大石田中学校では、３人１組でのグループ学習を協同学習（３Ｔ＝Team　Thinking ＆ Talking）と名づけ授業に取り入れている。３人１組で１つの課題に取り組むことを通して、自分の考えを伝え、わからないこ

とをわからないと素直に表現し、互いに教え合うことに、あまり抵抗なく取り組むことができている。一部理解や作業に時間を要する生徒がおり、習熟度の差が大きい現状がある。しかし、集団での学びが比較的しやすい学級である。

本時は２次方程式の解が整数になる場合と、無理数を含む場合との解と式の比較を通して、式を因数分解できるときの解き方について考えさせていく場面である。前時に、６つの２次方程式を解かせた。本時の導入では、その６つの２次方程式の解と式の特徴の違いに気づかせる問題を、協調学習で行わせた。数学を苦手とする生徒も、√がついているものとついていないものなど、直観的に見分けることに期待した。また、共同で行うことで、様々な視点からの気づきがあることも期待し、全員が参加できる授業づくりを目指した。

⑺　本時で取り入れた「ＵＤの視点」による手立て

ａ　グループ学習による論点の焦点化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」③⑥、Ⅲ「関係づくり」②より）

導入の場面で、グループで本時の課題につなげるための話し合いを行った。３人グループになり、６つの２次方程式を、解が整数のものと無理数のものに分類できることを、対話の中から気づかせた。さらに、式が因数分解できるものとできないものに分けられることを引き出し、本時の課題へつなげた。

＊大石田中学校の協調学習（３Ｔ）について
３Ｔ（３Ｔ＝Team　Thinking ＆ Talking）とは、３人１組で１つの課題を共同で解決するために話し合う（質問し合う）活動のことを指す。ねらいは、数学を好きな生徒も嫌いな生徒も、理解度の高い生徒もそうでない生徒も、それぞれの持つ疑問や考えを出し合う過程を通して生徒同士のかかわり合いを高めることである。また、日常的にかかわり合いを持たせることで、学級全体が共同で学ぶことを自然な形として受け入れ、最終的にはどの生徒も「わかる、できる」集団づくりを目指している。

３Ｔの基本ルールは次の４つとしていた。
・疑問型から会話を始める。
・必ず全員が会話に参加する。
・３人の会話はできるだけメモする。
　（思考過程が後でわかるように）
・話し合う過程が大事なので、課題解決までは到達しなくてもよい。

図４－４－３　グループ学習（３Ｔ）

ｂ　発問・指示の工夫（ＵＤの視点Ⅴ「教師の話し方、発問や指示」②より）

全体への発問・指示はなるべく短い言葉で簡潔に行った。言い換えや補足の説明を減らすことにより生徒は、「聞き逃してはいけない」という緊張感を持ち、学習に取り組んだ。事前に発問の吟味を行い、指示事項等を精選したことが、生徒の集中力を高めることにつながった。

一方で、こまめな机間指導を行い、個に応じた声がけを行った。声がけは、ごく限られた

時間の中でも評価、ヒント、賞賛など多様であった。個々の生徒の実態把握、教科におけるレディネスの分析を十分に行ったことがこの場面で発揮されていた。

c　板書の工夫（ＵＤの視点Ⅵ「板書、ノートやファイル」②④より）

「平方根」や「因数分解」などの既習事項については内容を授業中に思い出しやすくするために、カードとして準備した。必要に応じて黒板に貼って全体へ提示したり、つまずいている生徒のところに持って行き個別支援に活用したりした。

「目標」は青、「課題」は黄色、「まとめ」は赤で囲み、生徒が授業の流れを理解しやすいような配慮がなされた。また生徒の考えを取り上げ板書するだけでなく、問題を解決する過程での生徒のつぶやきを逃さず取り上げ、板書した。

本時のポイントとなる用語などを意識させるために、宅配物に使われるような「取り扱い注意」マークを用語のそばに貼るなどの工夫も見られた。

d　板書と対応したワークシートと実態に合わせた配慮（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」③④より）

板書の構成と生徒に配付したワークシートの構成が同じで、黒板を見ながら、今自分はどこに書けばよいのかが、一目でわかるようにした。

また、ワークシートと別に、練習問題のプリントを作成し配付した。練習問題では、自力解決ができる喜びと難しい問題にも取り組もうとする意欲を持たせるために、難易度の違う複数の問題を用意した。練習問題の裏には、自力解決を促すためのヒントを手書きで加え載せた。生徒が自分で問題を選択して取り組めるような配慮がなされた。

図４－４－４　机間指導

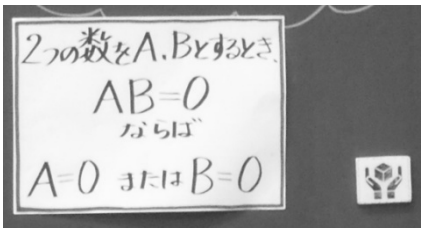


図４－４－５　既習事項カード

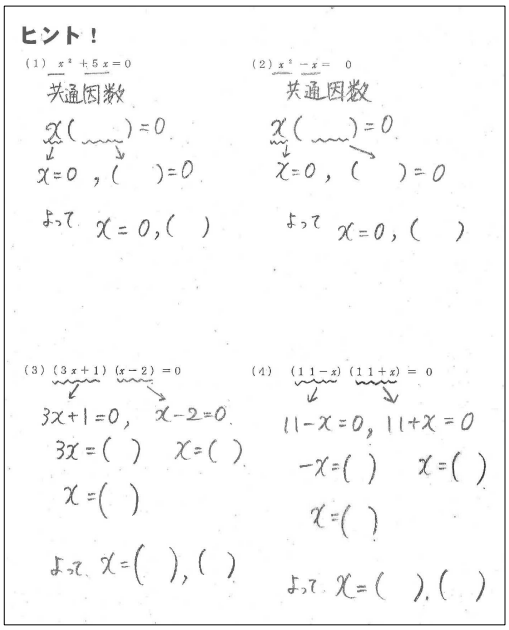


図４－４－６
ヒントを書き加えた練習問題プリント

イ　１年生数学の授業　～単元名　比例・反比例～

１年生は、指導者の働きかけに精一杯取り組もうとする姿が見られる。指導者は笑顔で生徒に接し、生徒も生き生きと活動している。生徒と指導者との信頼関係が構築されている。

本単元の指導をするにあたっては、教科担任２名で事前検討を行った。配慮を要する生徒に